

巻頭言

政治、経済をはじめ、我が国の社会全般に何ともいえぬ閉塞感が漂う中、新しい年、2011年が明けました。本年はウサギ年、「ピョンピョンと飛躍できるのでは?!」新年早々、米国経済の上昇基調が明らかになってきたこともあり、我が国の景況についても期待感が少しずつ膨らみつつあるようです。とはいうものの、為替、資源価格、国内政治、外交問題等々我が国経済社会を取り巻く不確定要素は枚挙に暇がありません。やはり、新しいウサギ年もなかなか先が見通しにくい一年になるのではないのでしょうか。

こうした、いわば波乱含みの時代に企業の命運を左右するのは、その「経営力」にほかなりません。先が読めない時代だからこそ、企業経営においては、次々と発生する予期せぬ課題に適切かつ迅速に対応し、「思い切って突っ込むか」「我慢して内部を固め体力を温存するか」等、的確な判断・行動が求められます。私たちはこれまでも、その判断・行動の差が、同業種でも「A社は時運を活かして大きく飛躍」一方「B社は時機を逸して低迷」といった厳しい現実を招来することを何回も目の当たりにしてきました。

それでは、「経営力」とは一体何なのでしょう。経営陣の資質やリーダーシップ、技術力、ブランド力、マーケティング力・・・経営のポイントとなる要素は色々ありますが、これらを結集した総合力なのでしょう。私は、リーダーをはじめとした人材、情報、技術、ブランド、ネットワーク等、あまたある経営資源を高めるとともに、これらを有機的かつ柔軟に結合して新たな価値を生み出す力（これは時として仕組みであったり企業文化であったりもします）こそが、「経営力」なのではないかと思えます。

そこで本誌「Best Value 第26号」では、価値総合研究所が経営コンサルティング業務で培った豊富な知見を基に、こうした「経営力」について、主に経営マネジメントの面から様々な議論を展開してみました。先を見通しにくい時代の企業経営を考えるうえでの一助となれば幸いです。そして、こうした「経営力」が重要であるのは、企業に限ったことではありません。今や国、自治体から家計、個人に至るまで色々なステージで「経営力」が求められており、世の中の関心事になっています。近時、「もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」が200万部のベストセラーになったのも偶然ではないでしょう。

さて、申し遅れましたが、私は昨年11月に（株）価値総合研究所の社長に就任いたしました。私ども価値総研は、今後も（株）日本政策投資銀行及び（株）日本経済研究所と連携しながら、より良い我が国経済社会づくりのために、一層の飛躍をめざしてまいりますので、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

蛇足になりますが、私どもシンクタンクの経営もなかなか難しいものです。「先導的でキラリと光る調査研究や提案等コンテンツづくり」と「持続可能な経営基盤づくり」の両立をめざし、私どもなりの「経営力」を発揮、チャレンジをしていきたいと思っております。

代表取締役社長 金谷 隆正